

小人すごろく

はまち

「やつほー☆ あたし、阿袖（あそで）くれあ！ 突然だけど皆には、小人すごろくの駒になつてもらいまーす☆」

大きめの鞆から、同年代の小人が39人詰められた透明アクリルケースを取り出し、宣言する。

暗闇から解放された小人たちは、何が起こったか分からないといった様子で、あたしを見て悲鳴を上げる人もいる。

まあ当然だよねー。学校で授業を受けていたら突然縮小魔法に巻き込まれて、クラス丸ごと拉致られたんだもん。

気が付くと目の前に超巨大な女子高生がいるとか、驚くのも無理ないか。

「あたし、学校でテーブルゲーム部ってのに入ってるんだけどさ。今度、

部員それぞれで自作の小人すごろくゲームを持ち寄って遊ぶことになったんだよね。あたしの自作すごろく、面白いって言ってもらいたいからさ。試遊ってことで付き合って欲しいんだよね」

そう言いながら、アクリルケースの蓋を外し、適当に選んだ小人を一人摘まみ上げる。髪を金色に染めたやんちゃそうな男子生徒。あたしと同じ陽キャって感じ？ あたしは茶色に染めてるけど。

スタート地点に小人を降ろす。小人の目の前に広がるのは、部屋の床いっぱいに敷かれた大きな紙。

あたしですら、紙の上で大の字に寝ころべるぐらい大きいもん。小人にとって、学校のグラウンド以上かな？

「まあとりあえず始めよつか。やつてるうちにルールが分かってくるだろうからさ！ それじゃサイコロを転がして……と。はい、5が出たよ。5マス分進んで進んで！」

女の子座りから少し身体を前にかがめ、スタート地点から伸びた線、5
つ目に描かれた丸をとんとん叩く。

あたしの頭と長い髪で暗がりになったスタート地点にいる金髪の小人。
突然、その小人が怒声を上げる。

「ふざけんなバケモノ女！ さっさと元に戻せよ！ わけわかんねえお
遊戯に巻き込んでんじや——」

ダアンツ！！

グーに固めた拳を、スタート地点に思いっきり振り下ろす。
鳴る衝撃音。振動する床。アクリルケースから上がる小さな悲鳴。

拳を上げると、スタート地点周りは飛び散った鮮血に染まっていた。

小人がいたはずの場所には、赤黒く濡れたぺっちゃんこな肉と服の塊。あたしの指ほどしかない小人にとつて、拳の大きさは背よりも高い肌色の岩石。それが、腕力に任せた速さと質量で振り下ろされたのだ。人の形なんて、保てるわけがなかった。

「……ゲームってさ。楽しく笑顔でやるもんだよね。負けた時の悔しい気持ちも醍醐味だけどさ。無意味に罵倒されて、嫌な気持ちで遊びたくはないじゃん？」

声のトーンを落として、アクリルケースの小人たちに語り掛ける。

「君たちも、無意味に死んだりしないでよね。たくさんイベントマスを用意してるんだから、せめて死亡マスに止まった時に死んで欲しいな。無事にゴール出来たら、生き残りは帰してあげるんだからさ」

絶句する生徒。へたり込む生徒。嘔吐している生徒もいる。反応は様々だけど、未だ反抗しようという生徒は一人もいなかった。

「ほら、あそこでゴール賞品の先生も待ってるよ。一緒に学校へ帰れるよ、皆で頑張ろう！ まあサイコロ振るのはあたしだけど☆」

声のトーンを戻し、紙の向こう側、ゴール地点の側に置かれたビーカーを指さす。空気確保の為わずかに隙間を開けつつ、生徒手帳で蓋をした透明ビーカー。その中に閉じ込められ、生徒が一人脱落した一部始終を見て泣き崩れている若い女性教師を。

「さっ、気を取り直してゲーム再開だよ！ 次の駒は君。スタート地点はちよつと汚れてるから、サービスで5つ目のマスからスタートにしてあげるねー☆」

さつき嘔吐してた気弱そうな女子生徒を摘まんで紙の上に降ろし、サイコロを振る。

「はい、次は6！ 進んで進んで〜！」

駒の小人はスタート地点の肉塊から逃げるように、小走りで6つ目のマスへ進む。そのマスに書かれていたのは……

【駒の小人はお尻の下敷きになって、一人分休み】

「あはは、いきなりマニアックなの引いちやったね〜☆ まあ死亡マスじゃないかって良かったじゃん！ それじゃ早速……」

恐怖に悲鳴を上げる小人を紙から摘まみ上げ、女の子座りで床についていたお尻を上げる。潰さないように、お尻の真ん中、谷間の隙間に入るよ

うセツトして……

「よいしょ……。体重を掛け過ぎて、潰れないようにしないとね……。まあ潰れちゃったらその時はその時ってことで……。♡」

小人の黒い制服と正反対な、真つ白なショーツで包まれたお尻で小人を手加減プレスする。学校から帰ってきたばかりで制服のままだけど、スカートの丈はかなり短くしている。座ったら、ショーツが直接床に触れるぐらいには。

一日分の汗が染み込んだショーツと、肛門付近の匂いに包まれながら、じたばた暴れる小人の感触を楽しみつつ、次の駒をアクリルケースから取り出す。次は太った男子生徒だ。

「こいつが同じように休みマスに止まるか、死亡マスに止まって脱落した

ら、お尻から解放されるからね☆ まあほぼ全てのマスがそれだから、あつという間だろうけど……♡」

そう言ってサイコロを振り、小人を2マス進ませる。そこに書かれていたのは……

「ほら、最初の死亡マス……♡」

【駒の小人は噛まずに丸呑みされて、脱落】

小人の男子生徒が青ざめて、逃げ出す。すかさず捕まえて、足を掴まんで宙づりにする。

「お尻の下の小人もそろそろ息苦しくなってるだろうし、あたしもお昼から何も食べてなくてお腹が空いてるからさ……。ちようどあんたが太った

小人で良かった。他の生徒よりはカロリーありそう……♡」

小人の足を摘まんだ手を、あたしの顔の上に持っていく。獲物に喜んでいるのか、タイミングよくお腹がぐうと鳴り、思わず舌なめずりをする。

「あたしって結構胃腸が強いからさ。服のまま食べても、お腹壊すことはほとんどないんだ。全部まとめて消化してあげるね☆ あーん……」

口を大きく開け、唾液まみれの口内に小人を落とす。べちやつと舌の上に落ちたのを確認し、口を閉じる。

これであたし特製牢獄の完成。いや、処刑場かな？ 呼吸困難になる前に、ぐちゅぐちゅと口を動かして唾液の分泌を促し……大量の唾液もろとも、小人を喉奥へ押し込む。

ごくくんっ……っ……♡

小人の体格が良いからか、奈落へ落ちまいと抵抗しているからか。喉奥でつつかえる。

食道の蠕動運動で、ゆっくり胃の底へ落とし込むのも良いけど。

鞆から水の入ったペットボトルを取り出し、蓋を開け、口を付けて。

ごくっ……ごくっ……ごくっ……♡

一気に流し込む。飲料水の滝に巻き込まれ、あっという間に小人の感触が下の方へと消えていった。

「ふはぁ……ごちそうさま☆ 水で胃液が薄まったから、消化されるのがちよつと長引くかも。良かったね♡」

お腹をさすると、たふんと中が鳴ったような気がした。中で何かが動いているような感じもする。きつと、溺れまいと、脱出しようと、胃の壁にすがっているのだろう。素手でそんなことしたら手が焼けちゃうのに……

♡

「さて、脱落者が出たから一人分休みは終わり。また駒として頑張っ
てねー☆」

お尻を浮かせて、蒸れたショーツの下敷きになっていた女子生徒を救出する。

咳き込む小人をマスの上に戻し、サイコロを振る。次は4だ。

「ほらほら、座り込んでないで進んだ進んだ。次のマスは……あちやー、また死亡マス……♡」

【駒の小人は肛門から直腸内に入れられて、脱落】

「あははっ！ 君、お尻に縁がありすぎう！ じゃあ今度は、シヨーツ越しじゃなくて、そのもつと内側にご招待してあげる……♡」

さつきよりも悲痛な叫び声を上げて逃げようとする小人を摘まみ上げ。空いた手で、棚からローションの入ったボトルを取り出す。

「いくら小さくても、さすがに小人をそのまま挿れようとすると潰れちゃうかも、だからさ。これで、ずるんって、通り抜けられるようにしてあげるね……♡」

そう言いながら、ローションを小人に塗りたくる。念のため、ローションにまみれた手を後ろからシヨーツ内に差し込み、お尻の穴にも塗る。こ

れで準備は万端かな。

「さつきより、もつと、もーつと、くさくて汚い所に入っちゃうね☆ まあさつき呑み込んだ小人と違って、死体は残るんじゃないかな。明日の朝、一緒に出てきた“もの”とまとめて、トイレに流しちゃうけどね……♡」

気弱そうな小人が恐怖する反応を楽しむため、わざと残酷な言葉の投げかけつつ、掴んだぬるぬる小人を再びお尻へ連れていく。

今度は、ショーツの中。その更に“中”へと幽閉する為に……♡